

厚生労働科学研究費補助金  
こころの健康科学研究事業

高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動の  
成因の解明と社会支援システムの構築に関する研究

平成16年度 総括研究報告書

平成17（2005）年4月

主任研究者 石井 哲夫

## 目 次

### I. 総括研究報告書

- 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動の成因の解明と社会支援システムの構築に関する研究…………… 1  
主任研究者 石井 哲夫 ((社) 日本自閉症協会・会長、目白大学・  
学術顧問)

### II. 分担研究報告書

- 青年期・成人期における高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究…………… 11  
分担研究者 石井 哲夫 (目白大学・学術顧問)

- 高機能広汎性発達障害の診断マニュアルと精神医学的併存症に関する研究…………… 15  
分担研究者 山崎 晃資 (東海大学教育研究所・教授)

- 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究…………… 21  
分担研究者 白瀧 貞昭 (武庫川女子大学・教授)

- 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する福祉施設間連携による支援システムの構築に関する研究…………… 25  
分担研究者 須田 初枝 (社会福祉法人けやきの郷・理事長)

### III. 研究報告書

- 青年期・成人期における高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究…………… 29  
石井 哲夫 (目白大学)  
副島 洋明 (副島法律事務所))  
石橋 悦子 (東京都自閉症・発達障害支援センター)  
北川 裕 (袖ヶ浦ひかりの学園)

高機能広汎性発達障害の社会支援における一般市民等の障害理解促進に関する研究—発達障害に関連する事件報道の分析及びメディアの課題……………	43
堀江まゆみ（白梅短期大学）	
野沢 和弘（毎日新聞社）	
高機能広汎性発達障害の診断マニュアルと精神医学的併存症に関する研究……………	66
山崎 晃資（東海大学教育研究所）	
石井 哲夫（東京都自閉症・発達支援センター）	
石橋 悦子（東京都自閉症・発達支援センター）	
神保 育子（東京都自閉症・発達支援センター）	
北川 裕（東京都自閉症・発達支援センター）	
富田真紀子（東京都自閉症・発達支援センター）	
都立梅ヶ丘病院における広汎性発達障害の受診状況についての研究……………	73
市川 宏伸（都立梅ヶ丘病院）	
触法行動に至った事例の臨床的特徴の研究……………	78
十一 元三（京都大学）	
高機能広汎性発達障害の反社会的行動への対応と予防高機能広汎性発達障害の母子例への対応……………	82
杉山登志郎（あいち小児保健医療総合センター）	
浅井 朋子（あいち小児保健医療総合センター）	
小石 誠二（あいち小児保健医療総合センター）	
東 誠（あいち小児保健医療総合センター）	
遠藤 太郎（あいち小児保健医療総合センター）	
大河内 修（あいち小児保健医療総合センター）	
海野千畝子（あいち小児保健医療総合センター）	
並木 典子（あいち小児保健医療総合センター）	
河邊真千子（あいち小児保健医療総合センター）	
服部 麻子（あいち小児保健医療総合センター）	

ADI-R（自閉症診断面接改訂版）日本語版と高機能広汎性発達障害への適応.....	93
---	----

中村 和彦（浜松医科大学）  
土屋 賢治（浜松医科大学）  
鈴木 敦子（浜松医科大学）  
武井 教使（浜松医科大学）  
森 則夫（浜松医科大学）  
辻井 正次（中京大学）  
藤田知加子（中京大学）  
杉山登志郎（あいち小児保健医療総合センター）

高機能広汎性発達障害に見られる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究.....	103
--	-----

白瀧 貞昭（武庫川女子大学）  
大西 次郎（武庫川女子大学）  
村上 凡子（武庫川女子大学）  
萱村 俊哉（武庫川女子大学）

高機能広汎性発達障害に生じうる反社会的行動の危機介入と予防的介入—幼児期における早期発見・早期療育から学齢期における学校への支援を含めた地域ケア・システムのあり方—.....	108
---	-----

清水 康夫（横浜市総合リハビリテーションセンター）  
本田 秀夫（横浜市総合リハビリテーションセンター）  
岩佐 光章（横浜市総合リハビリテーションセンター）  
今井 美保（横浜市総合リハビリテーションセンター）  
日戸 由刈（横浜市総合リハビリテーションセンター）  
中村 泉（横浜市総合リハビリテーションセンター）  
武部 正明（横浜市総合リハビリテーションセンター）  
小澤 武司（横浜市北部地域療育センター）  
片山 知哉（国立精神・神経センター武蔵病院）

広汎性発達障害(PDD)の超早期発見・対応に関する研究.....	112
----------------------------------	-----

高橋 脩（豊田市こども発達センター）  
酒井 雪枝（豊田市こども発達センター）

河村 雄一（豊田市こども発達センター）  
鈴木 秀行（豊田市こども発達センター）  
神谷 真巳（豊田市こども発達センター）  
佐藤 泰一（豊田市こども発達センター）  
和田 佳代（豊田市こども発達センター）

高機能広汎性発達障害に対する福祉施設間連携によるサポートシ  
ステムの研究…………… 119

須田 初枝（社会福祉法人けやきの郷）  
久保 義和（社会福祉法人けやきの郷）  
藤平 俊幸（社会福祉法人けやきの郷）  
佐々木敏宏（社会福祉法人けやきの郷）  
伊得 正則（社会福祉法人けやきの郷）  
寺下 真二（社会福祉法人けやきの郷）  
阿部 叔子（社会福祉法人けやきの郷）

療育及び福祉施設における高機能自閉症児者の処遇の実態と問題  
点についての研究 …………… 134

太田 昌孝（東京学芸大学）  
永井 洋子（静岡県立大学）  
金生由紀子（北里大学）  
武藤 直子（全国療育相談センター）  
鏡 直子（御茶ノ水発達センター）  
佐々木敏宏（ワークセンターけやき）

IV. 研究成果の刊行に関する一覧表 …………… 145

# I. 総括研究報告書

平成16年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）  
総括研究報告書

高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動の成因の解明と  
社会支援システムの構築に関する研究

主任研究者 石井哲夫（（社）日本自閉症協会・会長、目白大学・学術顧問）

**研究要旨：**

最近、青少年の犯罪（反社会的行動）が起きるたびに、加害者である青少年の心理状態が安易に論評され、行為障害、解離性障害、境界例、さらには高機能広汎性発達障害（HPDD）やアスペルガー症候群（AS）などの診断分類名が新聞紙上をにぎわす。国際的診断基準の普及によって、広汎性発達障害（PDD）の診断は一定の妥当性と信頼性をもって行われるようになった。しかし、HPDDとASの鑑別診断は未だに不明確な部分があり、ICD-10においてもASの診断分類学的妥当性に疑問のあることが明記されている。このためにHPDDの人々およびその家族は誤解・無理解・差別に悩まされ続け、時には、その人格をも否定されるような極論に曝されている。しかし、HPDDにみられる反社会的行動のほとんどは反応性に生じたものであり、周囲の人々による誤解・無理解が累積した結果、二次的に発現するものと想定されている。

東京都自閉症・発達障害支援センターにおいて相談受理したケースの状況を聞いていても、激しい興奮・乱暴・他害・攻撃、さらには執拗なこだわり行動によって、まさに家庭崩壊の状況に至っているものが相当数あることが明らかであり、家族がよくここまで耐え抜いてきたものと驚かされることがしばしばある。このような家庭に限局した行動が、どのようなメカニズムによって反社会的行動（犯罪、触法行為）に至るのかを解明し、その対応を立てることは急務のことである。

そこで本研究では、HPDDおよびASの人々が顕在化させる反社会的行動に焦点を当てて、次の4つの研究を行った。①青年期・成人期における高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究（主任研究者：石井哲夫）、②高機能広汎性発達障害の診断マニュアルと精神医学的併存症に関する研究（分担研究者：山崎晃資）、③高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究（分担研究者：白瀧貞昭）、④高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する福祉施設間連携による支援システムの構築に関する研究（分担研究者：須田初枝）。

本研究では、今年度、東京都自閉症・発達障害支援センターで相談を受理した事例の背景にある複雑な問題を分析し、触法行動を呈した事例について司法関係者との詳細な検討を行った。さらに福祉施設における処遇状況と困難さについても検討した。さらにHPDDおよびASの人々が関係する犯罪についての報道の仕方を膨大なデータベースから抽出して、分析を行った。その結果、明確になったことは、HPDDおよびASの人々の反社会的行動には共通する生起メカニズムがあり、彼彼女たちの障害特性を基盤とする社会的不適応行動が反社会的行動に急変する前兆をうまくとらえて、適切な予防的対応を行うことができれば、相当数の事例で反社会的行動の顕在化を防ぐことができる可能性を見出した。さらに、乳幼児期から学齢期にかけて適切な対応がなされれば、青年期・成人期に至って発現する反社会的行動の発現も、かなりの確立で予防し得ることも示唆された。報道機関がこのような諸問題を正確に理解し、啓発活動に協力してくれれば、本研究の目的である反社会的行動の社会的支援システムを構築することも夢ではなくなってきた。

本研究が、次年度以降も順調に成果を積み重ねることができれば、多大な社会的貢献をなし得るものと確信している。

**分担研究者**

山崎晃資 東海大学教育研究所・教授  
白瀧貞昭 武庫川女子大学大学院・教授  
須田初枝 （福） けやきの郷・理事長

**A. 研究目的**

最近、青少年の犯罪（反社会的行動）が起きるたびに、加害者である青少年の心理状態が安易に論評され、行為障害、解離性障害、境界例、さらには高機能広汎性発達障害（HPDD）やアスペルガー症候群（AS）などの診断分類名が新聞紙上をにぎわす。国際的診断基準の普及によって、広汎性発

達障害（PDD）の診断は一定の妥当性と信頼性をもって行われるようになった。しかし、HPDDとASの鑑別診断は未だに不明確な部分があり、ICD-10においてもASの診断分類学的妥当性に疑問のあることが明記されている。このためにHPDDの人々およびその家族は誤解・無理解・差別に悩まされ続け、時には、その人格をも否定されるような極論に曝されている。しかし、HPDDにみられる反社会的行動のほとんどは反応性に生じたものであり、周囲の人々による誤解・無理解が累積した結果、二次的に発現するものと想定されている。

わが国においては、知的障害を有するPDDへの対応はかなりの成果を上げてきているが、HPDDに対する社会的支援システムは未整備である。東京都自閉症・発達障害支援センターにおいて相談受理したケースの状況を聞いていても、激しい興奮・乱暴・他害・攻撃、さらには執拗なこだわり行動によって、まさに家庭崩壊の状況に至っているものが相当数あることが明らかであり、家族がよくここまで耐え抜いてきたものと驚かされるものがしばしばある。このような家庭に限局した行動が、どのようなメカニズムによって反社会的行動（犯罪、触法行為）に至るのかを解明し、その対応を立てることは急務のことである。

そこで本研究では、HPDDおよびASの人々が顕在化させる反社会的行動に焦点を当てて、次の4つの研究を行った。①青年期・成人期における高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究（主任研究者：石井哲夫）、②高機能広汎性発達障害の診断マニュアルと精神医学的併存症に関する研究（分担研究者：山崎晃資）、③高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究（分担研究者：白瀧貞昭）、④高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する福祉施設間連携による支援システムの構築に関する研究（分担研究者：須田初枝）。

## B. 研究方法

1. 青年期・成人期における高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究：2つの研究が行われた。

①実際に犯罪を犯したHPDDおよびASの人々の弁護に当たっている弁護士と、福祉心理学の専門家がタイアップして、詳細な事例研究を行った。②雑誌記事検索データベース（271万件収録）から反社会的事例のデータを抽出し、マスコミの報道の仕方を分析した。

2. 高機能広汎性発達障害の診断マニュアルと精神医学的併存症に関する研究：5つの研究が行われた。

①東京都自閉症・発達障害支援センターで、平成15年4月から平成16年11月末までに相談を受理した1,221例のうち、激しい問題行動（反社会的行動）を有する45例（3.7%）について、年齢、性別、主訴、反社会的行動の内容、家族歴・教育歴・治療歴などを詳細に分析した。深刻な反社会的行動を有する事例については、定期的な面接を行い、時には薬物療法も試みた。②都立梅ヶ丘病院で、平成4～14年に受診したPDDのうち、HPDDと診断された230例について、年齢、性別、受診経路、問題行動などについて分析した。③家庭裁判所、刑務所、少年院、児童自立支援施設などの12機関で、55例についての面接および聞き取り調査を行った。家裁調査官のスーパーヴァイザーも行い、詳しい資料を得ることができた。④平成13年11月から平成16年6月の間に、あいち小児保健医療総合センターを受診したHPDD児のうち、母親もHPDDが疑われた25組について検討した。母子治療によって行動の改善が得られた事例が多く、今後の対応策に貴重な示唆が得られた。⑤膨大な項目からなる自閉症診断面接改定版（ADI-R）を訳出し、実際に米国に赴いて使用経験を得てきている。

3. 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究：3つの研究が行われた。

①「新奇場面法」を用いてHPDDハイリスク児を1歳半健診で検出し、継続的な発達のフォローアップを行った。さらに、神戸地区の司法関係者との連携を図るべく準備をすすめて、これからの共同研究の見通しを得ることができた。②横浜市北部地域で行われている早期発見・療育を基盤としつつ、将来の特別支援教育の実施を視野に入れた一貫的な早期療育の課題を検討した。③豊田市で行われている乳幼児健診をベースにして、HPDDおよびアスペルガー症候群（AS）が、どのくらい早期に診断可能なのかを検討した。

4. 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する福祉施設間連携による支援システムの構築に関する研究：2つの研究が行われた。

①社会福祉法人けやきの郷に関連する福祉施設におけるHPDDの人々に対する対応の仕方と意識を調査し、福祉施設でどのような処遇が可能か、なにが問題となるのかを検討している。②HPDDおよびASの人々61例について、不適応行動及び反社会的行動の特徴に関する調査を行い、自閉症判定基準普及版B1.0による分析によってASの人々の生活上の困難さを浮き彫りにしている。



それぞれにHPDDおよびASの人々との実際的なかわりを持ちながらの地道な研究であり、司法関係者との連携が進みつつあることは特筆に値する。

#### (倫理面への配慮)

本研究においては生物学的侵襲を行う可能性はないが、アンケート調査および面接を行うに当たってはプライバシーの侵害のないように十分な配慮を行った。収集された個人情報管理を徹底した。

### C. 研究結果と考察

HPDDおよびASの反社会的行動の成因の解明と社会的支援システムの構築に関する研究の初年度に当たる平成16年度は、以下の研究成果が得られた。

#### 1. 青年期・成人期における高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究：以下の2つの研究を行った。

1) 青年期・成人期におけるHPDDにみられる反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究(石井)：HPDDの人々が犯した犯罪についての報道が相次いでなされている。しかし、その詳細は新聞報道などで知るにとどまることが多いが、本研究では、実際に弁護活動を行った弁護士に研究協力者として参加してもらい、詳細な検討を行った。その結果、①HPDDの人の社会的行動を阻害する因子として、認知の障害(他者理解の不全、時系列の認知の不全、視覚優位の理解、現実-空想・過去-現在・自-他といった意識の切替の不全)、統合性の障害(体系的な自己不全、組織的な行動の不全)、社会性の障害(認知の障害、統合性の障害から、非社会的行動をとりやすい)が明らかになった。②非社会的行動から反社会的行動に移行する時に、それを抑止する人的支援がないことが共通していた。③反社会的行動を生む「攻撃」欲求が、HPDDの障害特性であるとは言えず、突飛で理解しにくい非社会的な欲求や行動の中で、偶発的に反社会的行動に至ってしまうと理解される。④PDDの人が、自分の犯した犯罪の原因と結果の関係を自覚することは非常にむずかしく、実際の結果と本人の意図とは大きくズレている。⑤罰を与えて反省を促す手法には効果がなく、意図と行為とその結果の関係を理解し、自分の行動を自律的に調整する力を養う支援が必要である。⑥社会生活上のルールや行動の基準枠を明確にし、ルールを守ることで破ることによって生じる結果を理解させる支援者(フレームワーカー)の役割の分化と協働が必要である。⑦現実に社会のルールの中で自律性が保てなくなった場合、反社会的行動に至る前に、一時

的に避難できるシェルターを確保することが重要である。

2) HPDDの社会支援における一般市民等の障害理解促進に関する研究-発達障害に関連する事件報道の分析及びメディアの課題-(堀江)：豊川事件と長崎事件の新聞報道を、雑誌記事検索データベース(271万件収録)から検索して、HPDDの報道の仕方を検討した。その結果、a)新聞報道の特徴として、①初期報道において「殺害事件+障害・PDD・AS」の関連を記事にする傾向があり、②見出し分析では、ワンフレーズ報道にその特徴が顕著であり、③発行地域別に見ると、事件発生近隣の地方版によりこの特徴が見られ、④中央版、後期報道および解説記事などでは殺害と障害の関連を否定する論調で取り上げられることなどが明らかにされた。b)雑誌報道の特徴としては、①事件の猟奇性や特異性、②事件の発生環境・要因、③事件の報道姿勢などに焦点を当てた記事が多かった。いずれにしろ「犯罪=障害」の構造がイメージされる報道の多いことが認められた。

#### 2. 高機能広汎性発達障害の診断マニュアルと精神医学的併存症に関する研究：より簡便な診断基準を作成して精神医学的併存症を明らかにすることと、反社会的行動の処遇についての提言を行うことを目的として、以下の5つの研究が行われた。

1) 東京都自閉症・発達障害支援センターで対応した「激しい問題行動」を有する事例の研究(山崎)：平成15年4月から平成16年11月末までに相談を受理した事例は1,221例であり、激しい問題行動(反社会的行動)を有する事例は45例(3.7%)であった。年齢分布では、11~20歳(42.2%)が最も多く、ついで21~30歳(37.1%)、31~40歳(13.3%)の順であった。本人及び家族から聴取した診断分類名は、PDD(46.7%)、AS(33.3%)、適応障害(4.4%)であったが、未診断の事例が7例(15.6%)いたことは注目される。多様な問題が明らかにされたが、①継続的な支援システムがない、②医療機関が最後まで対応してくれない、③行き場がなく家庭崩壊状態にある事例が多い、④センターの現状では対応に限界があるなどが重要であった。自閉症・発達障害支援センターの体制を早急に改善する必要がある。社会の悲惨な裏面をみる思いで、資料の分析を行った。

2) 都立梅ヶ丘病院におけるHPDDの受診状況についての研究(市川)：平成4~14年度に受診したPDD患児の動態をみると、①子ども人口が減少しているにもかかわらず、この10数年で約2.5倍に増加しており、②平成10年度以降、HPDDが急増し、③HPDD群の主訴は、学習障害、集中困難、不登校、気分変動などが多く、鑑別診断が重要と思われた。とくに思春期以降の事例で

は、社会的不適応から精神病様症状をきたし、それが反社会的行動に移行することが多く、予防的な対応システムの構築が不可欠である。

3)触法行動に至った事例の臨床的特徴の研究(十一)：家庭裁判所、刑務所、少年院、児童自立支援施設などの12機関で、55例についての面接および聞き取り調査を行った。その結果、①PDDを持つ青少年あるいは成人のうち、触法行動を起こしやすいのは高機能者であることが明らかとなり、②性的関心型の割合の高さは、本調査では思春期ケースが多かったことを反映していると考えられ、問題発生の基盤はいずれも「高次対人状況型」であり、③ほとんどのケースが事件を起こすまで未診断であったことが認められた。HPDDへの早期診断と適応支援が、これらの問題の予防にとって重要であった。

4)HPDDの母子例への対応についての研究(杉山)：平成13年11月から平成16年6月の間に、あいち小児保健医療総合センターを受診したHPDD児のうち、母親もHPDDが疑われた25組について検討した。その結果、①激しい行動障害の存在や、不登校、うつ病など二次障害を来したものが多く、②全体の76%に児童虐待が認められた。③子どもの入院治療や母親への薬物療法を含む、包括的な母子平行治療を行い、虐待に関しては89%に、子どもの問題行動に関しては84%に著しい改善が得られた。④今後、母子症例の臨床的特徴と治療的介入についての検討を行うことが必要であると思われる。

5)自閉症診断面接改定版(ADI-R)・日本語版のHPDDへの適応についての研究(中村)：児童精神科の臨床経験に乏しい一般精神科医にも活用し得ることを目的として、ADI-R・日本語版を作成し、ビデオを用いた予備的研究では90%を超える一致率が得られた。

3. 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究：HPDDの早期発見・診断・療育のための専門機関の連携システムの構築、乳幼児期から就学期以降までの継続的な社会的支援システムの構築、などを目的として以下の3つの研究を行った。

1)HPDDに見られる反社会的行動に対する早期支援システムに関する研究(白瀧)：「新奇場面法」を用いてHPDDハイリスク児を1歳半健診で検出し、継続的な発達のフォローアップを行う体制を確立することが必要である。今年度は、早期発見のための検出指標・検出場所・その後の療育内容などが確立できた。さらに、HPDDを持つ子どもが、後になって反社会的行動を生起させる場合の成因の解明には、組織的な司法事例の後方視的研究が必須であり、児童青年

精神科医で家裁などの医務室技官をつとめる人たちの協力を得て、どのような道筋で将来、必要な情報を得ることができるとの検討をスタートさせた。

2)HPDDに生じうる反社会的行動の危機介入と予防的介入—幼児期における早期発見・療育から学齢期における学校への支援を含めた地域ケア・システムのあり方—(清水)：横浜市北部地域で行われている早期発見・療育を基盤としつつ、さらに学齢期独自の支援プログラムを開発・実践することにより、幼児期からの一貫した地域ケア・システムをモデル化することが出来るとの結論を得た。さらに、課題として学校におけるHPDDに対する特別支援教育との密なる連携作業が必須のものであることが明らかにされた。

3)PDDの超早期発見・対応に関する研究、高機能広汎性発達障害幼児と家族への早期支援システムに関する研究(高橋)：豊田市で行われている乳幼児健診で、PDDハイリスク・ベビーの早期発見・対応に具体的な方法として、以下のことを明らかにした。①3ヵ月健診で保健師との視線が合わなかった、反応が乏しい、養育者が養育困難を感じている、発達に心配がある、などの特性を有する子どもをPDD疑い児として事後指導グループに入れ、②生後5～6ヵ月頃から事後指導グループに参加させ、月に1度、2時間半位の遊びと個別相談を組み合わせた療育を実施した。③これらの前方視的フォローアップの中で、行動観察・発達評価を行いながら経過を観察し、PDDの疑いが濃厚になった時点で子ども発達センターへの紹介などを行うことが適切であることを明らかにした。HPDD支援ニーズの把握、地域療育機能の検討などの結果から、保育園・幼稚園・小中学校などが従来から持つ療育機能に加えて、より軽度で発見の困難なHPDD児に対する発見機能をもてるような高度の専門性が要求されることを明らかにした。

4. 高機能広汎性発達障害にみられる反社会的行動に対する福祉施設間の連携に関する研究：福祉現場と療育機関との連携の中で、HPDDの社会的不適応行動に対してどのような支援システムを構築するのかを目的として、以下の2つの研究を行った。

1)HPDDに対する福祉施設間連携によるサポートシステムの研究(須田)：関連諸施設の資料分析を行った結果、①対人関係の構築や社会生活上での困難さがあり、②PDD一般に見られる状況判断の悪さや自発性の低さから生じる、自ら課題に取り組むことのできなさがあり、③詳細で具体的な支援が必要であり、④社会生活スキルをある程度習得したことによって、HPDDの人が持つ状況判断の困難さや自発性の低さが見えにくくなっており、⑤この見えにくさが

地域生活を営む上で、トラブルを生起させ、周辺の人々の誤解を生ずることが明らかにされた。

2)療育機関および福祉施設における高機能自閉症児・者の社会的不適応行動と適応との関連についての研究(太田):HPDDおよびASの人々61例について、不適応行動及び反社会的行動の特徴に関する調査を行った。その結果、①ASでは初診年齢が高く、10歳過ぎに反社会的行動を示して初診する傾向があった。②自由記述では、集団生活ができない、友人が作れない、対人関係がうまく行かない、引きこもっている、攻撃性が強いなどの問題が認められた。③反社会的行動は21.3%にみられ、ASでは35.0%にみられた。④自閉症判定基準普及版B1.0による調査では、ASの人は、積極的に社会に関わろうとしているが、適応できないために反社会的行動を含む不適応行動を示す特徴がより強いことが示唆された。

#### D. 結論

最近、青少年の犯罪(反社会的行動)が起きるたびに、加害者である青少年の心理状態が論評され、行為障害、解離性障害、境界例、さらにはHPDDやASなどの診断分類名が報道されている。このためにHPDDやASの人々およびその家族は周囲の人々の誤解・無理解・差別に悩まされ続け、時には、その人格をも否定されるような極論に曝されている。しかし、HPDDにみられる反社会的行動のほとんどは反応性に生じたものであり、冷遇体験が長年にわたって重なる結果、二次的に発現するものであることが明らかにされた。

本研究では、今年度、東京都自閉症・発達障害支援センターで相談を受理した事例の背景にある複雑な問題を分析し、触法行動を呈した事例について司法関係者との詳細な検討を行った。さらに福祉施設における処遇状況と困難さについても検討した。さらにHPDD及びASの人々が関係する犯罪についての報道の仕方を膨大なデータベースから抽出して、分析を行った。

これらの研究の結果で明確になったことは、HPDDおよびASの人々の反社会的行動には共通する生起メカニズムがあり、彼/彼女たちの障害特性を基盤とする社会的不適応行動が反社会的行動に急変する前兆をうまくとらえて、適切な予防的対応を行うことができれば、相当数の事例で反社会的行動の顕在化を防ぐことができる可能性を見出した。さらに、幼児期から学齢期にかけて、適切な対応がなされれば、青年期・成人期に至って発現する反社会的行動の発現も、かなりの確立で予防し得ることも示唆された。報道機関が、このような諸問題を正確に理解し、啓発活動に協力してくれるれば、本研究の目的である反社会的行動の

社会的支援システムを構築することも夢ではなくなってきた。

本研究が、次年度以降も順調に成果を積み重ねることができれば、多大な社会的貢献をなし得るものと確信している。

#### E. 研究発表

##### 1. 論文発表

浅井朋子、杉山登志郎：不登校、小児科臨床 57巻増刊号；287-293、2004.

浅井朋子、杉山登志郎、小石誠二、東誠、並木典子、海野千歌子：軽度発達障害児が同朋に及ぼす軽度発達障害児が同朋に及ぼす影響の検討、児童青年精神医学とその近接領域 45(4)；360-371、2004.

遠藤太郎、杉山登志郎：自閉症とアスペルガー障害(1)、臨床脳波 46(8)；526-531、2004.

遠藤太郎、杉山登志郎：自閉症とアスペルガー障害(2)、臨床脳波 46(9)；590-595、2004.

蓮舎寛子、広沢郁子、市川宏伸：広汎性発達障害の発作様不安(“パニック”)、精神科治療学 19；985-990、2004.

Honda, H., Shimizu, Y., Imai, M. & Nitto, Y.:Cumulative incidence of childhood autism:a total population study of better accuracy and precision. Developmental Medicine & Child Neurology 47(1):10-8, 2005.

堀江まゆみ：知的障害のある人の消費者被害と消費生活の支援 -生活支援ワーカー調査から -、さぼーと 51(3)；44-53、2004.

市川宏伸：広汎性発達障害の現在、臨床精神医学 33；421-427、2004.

市川宏伸：AD/HD児への学校での援助のあり方 -医療現場から -、教育と医学 610号；58-65、2004.

市川宏伸：注意欠陥多動性障害、精神障害の臨床(上島国利、牛島定信、武田雅俊ほか編)、日本医師会雑誌特別号；201-202、2004.

市川宏伸：児童・思春期の精神科薬物治療の現状と課題、臨床精神薬理 7；1259-1268、2004.

市川宏伸：小児・思春期精神医療と他職種との連携の必要性、精神科 5；238-241、2004.

市川宏伸：軽度発達障害としての注意欠陥多動性障害(AD/HD)、療育の窓 130；10-14、2004.

市川宏伸：行為障害と医療、こころの臨床 23；422-425、2004.

市川宏伸：思春期のADHD、日本大学学生相談室報告書 30；128-158、日本大学本部学生相談センター(東京)、2005.

市川宏伸：行為障害と呼ばれる子どもた

- ち、児童心理 818 ; 36-39、2005.
- Ide, M., Muratake, T., Yamada, K., Iwayama-Shigeno, Y., Iwamoto, K., Takao, H., Toyota, T., Kaneko, N., Minabe, Y., Nakamura, K., Kato, T., Mori, N., Asada, T., Someya, T., Yoshikawa, T.: Genetic and expression analyses of FZD3 in schizophrenia. *Biol Psychiatry* 56(6); 462-465, 2004.
- 石井哲夫: LD・ADHD・自閉症・アスペルガー症候群「気がかりな子」の理解と援助、児童心理 ; 1-8、金子書房、2005.
- 副島洋明、佐藤幹彦: 知的・発達障害者をめぐる裁判の現場から—三つの事件とこれからの福祉—、そだちの科学 ; 94-102、日本評論社、2004.
- 副島洋明他: 刑法三九条は削除せよ! 是か非か、求められているのはむしろ新しい「責任能力論」である—処遇論と訴訟能力論の重要性を中心に、122-150、洋泉社、2004.
- 菅野実穂、市川宏伸: 成人のアスペルガー症候群、精神科 5 ; 25-28、2004.
- Kano, Y., Ohta, M., Nagai, Y., Pauls, D.L., Leckman, J.F.: Obsessive-compulsive symptoms in parents of Tourette syndrome probands and autism spectrum disorder probands. *Psychiatry Clin Neurosci* 58; 348-352, 2004.
- 小石誠二、杉山登志郎: アスペルガー症候群の依存症と鑑別診断、精神科 5(1); 19-24、2004.
- 是枝喜代治、小林芳文、太田昌孝: 自閉症児の運動模倣能力の特性、発達障害研究 25 (4); 265-280、2004.
- 中村和彦: 発達障害の生物学的精神医学への誘い(4)、アスペハート Vol.6 ; 82-84、2004.
- 中村和彦: 発達障害の生物学的精神医学への誘い(5)、アスペハート Vol.7 ; 93-95、2004.
- 中村和彦: 発達障害の生物学的精神医学への誘い(6)、アスペハート Vol.9 ; 88-90、2005.
- 名川勝、佐藤彰一、堀江まゆみ: 知的障害者の消費生活トラブルとその支援に関する研究、日本消費者教育学会第24回大会研究発表要旨集、18、京都教育大学、2004.
- 並木典子、杉山登志郎: 広汎性発達障害スクリーニング、小児科 45(11); 1980-1988、2004.
- Ohta, M. & Kano, Y.: Clinical characteristics of adult patients with tics and/or Tourette's syndrome. *Brain & Development* 25 Suppl. 1; S32-S36, 2003.
- 太田昌孝、金生由紀子、永井洋子: 思春期青年期の自閉症障害を持つ個人におけるカタトニアの症状—主として長期経過について—、東京学芸大学特殊教育研究施設研究報告 3 ; 81-88、2004.
- 太田昌孝: 自閉症圏障害の発達精神病理と表象機能、小児の精神と神経 44(4); 337-347、2004.
- 佐藤彰一、堀江まゆみ、野沢和弘、名川勝: 知的障害者の地域生活トラブル、日本法社会学会2004年度学術大会要旨集、15-18、立命館大学、2004.
- 佐藤彰一、名川勝、堀江まゆみ: 発達障害者の消費生活トラブル—その実態と法的・生活的支援のあり方—、国民生活研究 44(4) (印刷中)
- Sekizawa, T., Iwata, Y., Nakamura, K., Matsumoto, H., Suzuki, A., Suzuki, K., Sekine, Y., Takei, T., Minabe, Y., Mori, N.: Childhood-onset schizophrenia and tryptophan hydroxylase gene polymorphism. *Am J Med Genet* 128B(1); 24-26, 2004.
- 白瀧貞昭: アスペルガー症候群: 思春期以降例の診断に必要な幼児期情報、精神科治療学 19(9); 1063-1067、2004.
- 白瀧貞昭: 乳幼児期の発達、特集・自閉症理解の現在—より進んだ地平を求めて—、こころの臨床アラカルテ 23 ; 273-276、2004.
- 杉山登志郎: 高機能広汎性発達障害に見られるさまざまな精神医学的問題に関する臨床的研究、日本乳幼児医学・心理学研究 12(1); 11-25、2004.
- 杉山登志郎: 自閉症・アスペルガー症候群、精神障害の臨床・特別号 131 ; 203-204、2004.
- 杉山登志郎、河邊眞千子: 高機能広汎性発達障害青年の適応を決める要因、精神科治療学 19(9); 1093-1100、2004.
- 杉山登志郎: 高機能自閉症とアスペルガー症候群—軽度発達障害によって変わる教育・福祉・医療、実践障害教育 8月号 ; 2-9、2004.
- 杉山登志郎: 自閉症文化に沿った自閉症スペクトラムへの教育、発達の遅れと教育 2 ; 10-13、2004.
- 杉山登志郎: 境界線知能、そだちの科学 3号 ; 31-35、2004.
- 杉山登志郎、海野千畝子: 医療機関における再統合に向けた援助、母子保健情報 50号 ; 165-168、2005.
- 鈴木俊介、市川宏伸: 強迫性障害・摂食障害・解離性障害、精神科 4 ; 49-52、2004.
- 高橋 脩: アスペルガー症候群・高機能自閉症: 思春期以降における問題行動と対応、精神科治療学 19 ; 1077-1083、2004.
- 高橋 脩: 地域療育システムにおける自閉症の診断と説明、発達障害研究 26 ; 153-163、2004.
- 高橋 脩: 地域の療育力を考える、あおぞら2003 (岐阜市発達相談センター事業報告書)、pp.56-78、2004.

- Takebayashi, K., Sekine, Y., Takei, N., Minabe, Y., Isoda, H., Nishimura, K., Nakamura, K., Suzuki, K., Iwata, Y., Sakahara, H., Mori, N.: Metabolite alterations in basal ganglia associated with psychiatric symptoms of abstinent toluene users: a proton MRS study. *Neuropsychopharmacology* 29(5);1019-26, 2004.
- Takei, N., Nakamura, K.: Is in-seki-jisatsu, responsibility-driven suicide, culture-bound? *Lancet* 363(9418);1400, 2004.
- 立松英子、太田昌孝：知的障害の重い子どもの行動特徴—自閉症障害の合併およびシンボル機能の観点から—、小児の精神と神経 44 (4) ; 373-381、2004.
- 十一元三：広汎性発達障害の神経科学的基盤—扁桃体・辺縁系障害説を中心に、実践障害児教育 32(2) ; 10-15、2004.
- 十一元三：高機能自閉症とアスペルガー障害、障害者問題研究 32(2) ; 90-98、2004.
- 十一元三：アスペルガー障害の神経学的基盤、精神科 5(1) ; 6-11、2004.
- 十一元三：青年期以降の高機能広汎性発達障害、精神科臨床サービス 4(3) ; 332-338、2004.
- 十一元三：広汎性発達障害を持つ少年の鑑別・鑑定と司法処遇—精神科疾患概念の歴史的概観と現状の問題点を踏まえ—、児童青年精神医学とその近接領域 45 ; 236-245、2004.
- 十一元三：アスペルガー障害と社会行動用の問題、精神科治療学 19 ; 1109-1114、2004.
- 十一元三：広汎性発達障害における薬物療法、精神科治療学 19 ; 1173-1178、2004.
- 十一元三：特集にあたって—近年の成果を混乱する現場へ—、こころの臨床アラカルト 23 ; 241-243、2004.
- 十一元三：自閉症論の変遷、こころの臨床アラカルト 23 ; 261-265、2004.
- 十一元三、Prizant, B.M., Wetherby, A.M., Rubin, E., Laurent, A.C. : 近年の発達論的療育プログラム、こころの臨床アラカルト 23 ; 317-320、2004.
- 十一元三、岡田 俊：脳血行動態からみた高機能自閉症の前頭前野機能、脳と精神の医学 15 ; 361-369、2004.
- Toichi, M., Findling, R.L., Kubota, Y., Calabrese, J.R., Wiznitzer, M., McNamara, N. K., Yamamoto, K.: Hemodynamic differences in the activation of the prefrontal cortex: Attention vs. higher cognitive processing. *Neuropsychologia* 42; 698-706, 2004.
- Toyota, T., Yoshitsugu, K., Ebihara, M., Yamada, K., Ohba, H., Fukasawa, M., Minabe, Y., Nakamura, K., Sekine, Y., Takei, N., Suzuki, K., Itokawa, M., Meerabux, J.M., Iwayama-Shigeno, Y., Tomaru, Y., Shimizu, H., Hattori, E., Mori, M., Yoshikawa, T.: Association between schizophrenia with ocular misalignment and polyalanine length variation in PMX2B. *Hum Mol Genet* 13;551-561, 2004.
- Yamada, K., Nakamura, K., Minabe, Y., Iwayama-Shigeno, Y., Takao, H., Toyota, T., Hattori, E., Takei, N., Sekine, Y., Suzuki, K., Iwata, Y., Miyoshi, K., Honda, A., Baba, K., Katayama, T., Tohyama, M., Mori, N., Yoshikawa, T.: Association analysis of FEZ1 variants with schizophrenia in Japanese. *Biol Psychiatry* 56;683-690, 2004.
- 山崎晃資：注意欠陥/多動性障害、精神医学 47(2) ; 169-172、2005.

## 2. 著書

- Hong, K.M., Yamazaki, K., Banaag, C., Yason, D.: Systems of Care in Asia. Facilitating Pathways-Care, Treatment and Prevention in Child and Adolescent Mental Health - (Eds.: Remschmidt, H., Belfer, M.L., Goodyer, I.), Springer, Berlin · Heidelberg, pp.58-70, 2004.
- 市川宏伸：知りたいことがなんでもわかる、子どものこころのケア（市川宏伸、内山登紀夫、広沢郁子編）、永井書店（東京）、2004.
- 市川宏伸：広汎性発達障害の子どもと医療、かもがわ出版、2004.
- 市川宏伸：子どもの心の病気がわかる本、講談社、2004.
- 市川宏伸（編）：子どものための精神看護、医学書院、2005.
- 市川宏伸：精神疾患、小児外来診療指針（東京都立清瀬病院編）、pp.630-655、永井書店、大阪、2004.
- 太田昌孝：精神遅滞、（山内俊雄、小島卓也、倉知正佳 編）専門医をめざす人への精神医学第2版、医学書院、pp.474-480、2004.
- 白瀧貞昭：教室の中の子どもたち、神戸市小学校長会編「続 変容する子どもたち」、pp.30-46、2004年3月.
- 白瀧貞昭：早期発見・早期療育の必要性和そのポイント、「児童心理」編集委員会編「気がかりな子」の理解と援助、金子書房、pp.39-43、2005.
- 杉山登志郎：アスペルガー症候群および高機能広汎性発達障害のための援助、降籬志郎（編著）：軽度発達障害児の理解と支援、金剛出版、pp.130-157、2004.
- 杉山登志郎：コミュニケーション障害としての自閉症、高木隆郎・ハウリン、P. フォンボン、E. 編）、自閉症と発達障害研究の進歩 第8巻、星和書店、pp.3-23、2004.
- 杉山登志郎：教師のための高機能広汎性発

- 達障害・教育マニュアル、杉山登志郎・大河内 修・海野千畝子（共著）、少年写真新聞社、2004。
- 山崎晃資：児童精神科医の立場からみた青少年犯罪の諸問題、山崎晃資（編著）：青少年犯罪 - その病理と社会 -、明治安田生命社会事業団、東京都、pp.1-26、2004。
- 山崎晃資：子育て不安の処方箋 - 親と子の「こころのトラブル」相談室 -、東海教育研究所、東京都、2004。
- 山崎晃資：思春期精神保健対策、改訂第3版・精神保健福祉士養成セミナー・精神保健学、へるす出版、東京都、pp.119-129、2004。
- 山崎晃資：学校精神保健、学校医の手引き、日本医師会、東京都、pp.78-84、2004。

### 3. 学会発表

- 後藤美樹、有坂ふじみ、畔柳真理、吉野美代、山田佐登留、田中 哲、市川宏伸：思春期心理グループ（SST）実践について、第45回日本児童青年精神医学会、名古屋市、2004年11月5日。
- 平野亜紀、清水康夫、本田秀夫、今井美保、日戸由刈、五十嵐まゆ子：包括的コミュニティ・ケアの視点からみた高機能発達障害の早期介入 - 新たなニーズに対応したコミュニティ指向型プログラム群の開発 -、第14回日本乳幼児医学心理学会、大阪市、2004年11月6日。
- 市川宏伸：CPTを用いた注意欠陥多動性障害の検討、第34回日本臨床神経生理学会、東京都、2004年11月1日。
- 石井哲夫：自閉症児者への社会福祉援助における臨床心理学的実践、第23回心理臨床学会、心理臨床ワークショップ。
- 金生由紀子、太田昌孝：トゥレット症候群における攻撃性の研究、第34回日本神経薬理学会、都市センターホテル、東京都、2004年7月21-23日。
- Kano, Y., Ohta, M. & Nagai, Y.: Aggression in adolescents with Tourette Syndrome. 16th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, International Congress Centrum, Berlin, 2004年8月22-26日。
- 金生由紀子、太田昌孝、新井 卓、永井洋子：怒り発作からみた“高機能”発達障害における攻撃性（第2報）、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋国際会議場、名古屋市、2004年11月3-5日。
- 川村雄一、高橋 脩：自閉性障害の臨床像「折れ線現象」および「てんかんの合併」について、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月4日。
- 黒田知沙、白瀧貞昭、村上凡子：高機能広汎性発達障害における自己理解と孤独感の特性、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月5日。
- 熊上崇、藤川洋子、阿漕直樹、須藤 明、石川正人、十一元三：広汎性発達障害を持つ非行事例の特徴、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月5日。
- 岡田和子、溝口理知子、高橋 脩ほか：発達障害児における仕上げみがきへの母親の取り組み態度、第21回日本障害者歯科学会総会、大阪市、2004年11月13日。
- 岡田 俊、十一元三、崎濱盛三：高機能自閉症とアスペルガー障害における精神作業負荷時の自律神経活動、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月4日。
- Nakamoto, Y., Nakamura, K., Minabe, Y., Mori, N., Furukawa, A., Yamada, K., Yoshikawa, T., Mugishima, G., Sato, M., Niwa, M., Yoshii, M.: Gender and age differences in associations between peripheral-type benzodiazepine receptor (PBR) gene polymorphism and anxiety trait in normal human subjects: Society for Neuroscience 34<sup>th</sup> Annual Meeting Neuroscience, San Diego, Oct. 2004年。
- 中村和彦、関根吉統、尾内康臣、辻井正次、吉川悦次、杉山登志郎、土屋賢治、鈴木勝昭、三辺義雄、武井教使、森 則夫：アスペルガー症候群における脳内セロトニン・トランスポーター密度に対するPETを用いた研究、第14回日本臨床精神神経薬理学会、神戸市、2004年9月。
- 中村和彦、関根吉統、土屋賢治、鈴木勝昭、三辺義雄、武井教使、森 則夫、尾内康臣、辻井正次、吉川悦次、杉山登志郎：脳内セロトニン系の異常からみたアスペルガー障害の病態発生に関する臨床研究、第37回精神神経系薬物治療研究報告会、大阪府、2004年12月。
- Ohta, M., Kano, Y. & Nagai, Y.: Catatonia in adolescents and young adults with autism spectrum disorders: A long-term follow up. 16th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, International Congress Centrum, Berlin, 2004年8月22-26日。
- 太田昌孝、金生由紀子：自閉症圏障害青年におけるトゥレット症候群とカタトニア、第11回トゥレット研究会、名古屋大学教育学部、名古屋市、2004年11月3-5日。
- 崎濱盛三、岡田 俊、十一元三：非行事例の鑑別における児童精神科医の関与の必要性 - 広汎性発達障害が疑われた事例の調査をもとに -、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月5日。

- 染木志緒、白木沢史子、市川宏伸：ADHD児の自尊心に関する調査、第45回日本児童青年精神医学会、名古屋市、2004年11月3日。
- Suzuki, K., Nakamura, K., Shinohe, A., Watanabe, T., Mori, N.: Altered expression of mRNA for VLDLR and ApoER2 in lymphocytes from patients with schizophrenia and major depression: Society for Neuroscience 34<sup>th</sup> Annual Meeting Neuroscience, San Diego, Oct. 2004.
- 白瀧貞昭：LD、ADHD、高機能広汎性発達障害の特別支援教育をめぐって、発達障害療育研究会シンポジウム、1月24日、東京、2004年。
- 白瀧貞昭：「発達障害の理解と対応」兵庫県教育心理研究会、7月3日、神戸、2004年。
- Shirataki, S., Kuroda, C., Murakami, B.: Self-understanding and self-isolation in Adolescents with High-functioning Pervasive Developmental Disorders (HFPDD). 16th World Congress of IACAPAP, Sep. 22-26, Berlin, 2004年。
- 白瀧貞昭：発達障害児への特別支援教育を考える、日本応用心理学会、10月16日、神戸、2004年。
- 白瀧貞昭：広汎性発達障害について、日本障害者乗馬協会研究会、明石、2004年11月3日。
- 高橋 脩：自閉症の臨床 - その支援と楽しさ - (特別講演)、第45回中国四国精神神経学会総会、倉敷市、2004年10月29日。
- 高橋 脩：障害児の発達支援と家族支援 - 現状と展望 - (特別講演)、第45回児童青年精神医学会、名古屋市、2004年11月4日。
- 十一元三、岡田 俊：語の性質による前頭前野の記銘処理の変化、第6回日本ヒト脳機能マッピング学会、東京都、2004年。
- 十一元三：若年性双極性障害の躁病相における前頭前野機能の変化、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月4日。
- 十一元三、岡田 俊、崎濱盛三：高機能自閉症における前頭前野の記銘処理、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月5日。
- 十一元三、岡田 俊、崎濱盛三：司法事例を通じて見出される広汎性発達障害の特異的病理、第45回日本児童青年精神医学会総会、名古屋市、2004年11月5日。
- 山田佐登留、尾崎純子、大倉勇史、白木沢史子、菅野実穂、鈴木俊介、蓮舎寛子、広沢郁子、佐藤泰三、田中 哲、海老島宏、市川宏伸：梅ヶ丘病院の退院時診断と入院時診断の変更症例についての検討、第45回日本児童青年精神医学会、名古屋市、2004年11月4日。
- 山崎晃資：シンポジウム「健康教育実践者としての養護教諭 - 21世紀を輝いて生きる子どもを育てていくためには -」児童精神医学の立場から、全国養護教諭連絡協議会第10回研究協議会、東京都、2005年2月25日。

## II. 分担研究報告書



平成16年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）  
分担研究報告書

青年期・成人期における高機能広汎性発達障害にみられる  
反社会的行動に対する社会的支援システムの構築に関する研究

分担研究者 石井哲夫（目白大学・学術顧問）

研究要旨：

最近、高機能広汎性発達障害（以下HPDD）の人が関わった犯罪が報じられることが多いが、犯罪の実態や背景について正確に知ることは難しい。HPDDの人の反社会的行動に対する社会的支援システムの構築を目指す社会福祉の立場から、石井（研究1）は、「どうして、このような犯罪が起きたのか」を、HPDDの障害特性や心理メカニズムに照らして、福祉心理学的に解明することとした。併せて、対人援助が得られることにより、反社会的な行動が生じないで済んでいる状況と、それが失われた時に反社会的行動が生じてくる経緯を追った。

本研究をすすめるにあたり、まず、東京都自閉症・発達障害支援センター等に持ち込まれる、反社会的行動に関わる事例をもとに検討を行った。また、同時に、犯罪を犯したとされるHPDDの人の弁護を数多く手がけている副島洋明弁護士の協力を得て、司法事例を通した検討を行った。同弁護士は、現在のように刑罰というシステムだけでは罪の意識も贖罪の気持ちも持ち得ない障害者がいることを経験的に見抜き、「罪を犯した人が罪を悔いることができるようにする場を作り学ばせることが、刑の執行に代わるべき1つの結末の付け方である」と考え、コミュニケーション機能が不十分な自閉症の人と話し合うことの重要性も指摘している。

今年度の研究の結果、HPDDにかかわる反社会的行動とは、意図的な暴力行為や殺傷などの一般的な意味での反社会的行動とは異なり、いわゆる非社会的行動（社会のルールやモラル、大多数の人に共有される価値観に基づかない行動）の進展の中で、本人のイメージとは大きく異なる相手の反応に驚き、動揺しパニック状態に陥る、といった偶発的な状況が生じてしまったのではないかとの見解が得られた。それは、自らの意図や意志にそって自律的に行動を起こすことができにくいHPDDの人の障害からくると思われる行動特性からして、意図や計画に基づいて反社会的行動に至るとは考えにくいという、これまでの我々の臨床経験に基づく見解と一致した。

また「対人性の障害＝相互的に交流する対人関係が形成できにくい」という障害特性を有することから、家庭内暴力等があっても、HPDDの人が自分から家庭外の社会に出て、他人に対する反社会的行動は起こりにくい構造も明らかになった。そして、HPDDの人が、家族という重要なシェルター機能を喪失することから、自力では対応不可能な社会に突然押し出され、非社会的な心理状況のまま、いわゆる反社会行動に至ってしまう過程が明らかになった。

以上のことから、HPDDの人が社会的ルールの意味を理解し、また他人の支援を受けることの有益性を知ることが、反社会的行動を自己抑制していく力を育て、反社会的行動の予防あるいは改善につながるものと考えられた。しかし、これらのことは、HPDDの人の障害特性を十分理解し、対人援助の専門性を有する支援者の存在が不可欠であり、その上で、支援プログラムおよび社会的支援システムの構築が求められると言えよう。そうでなければ、いかに合理的に構造化されたシステムでも有効に機能しないとの考察に至った。

一方堀江（研究2）は、HPDDの人に対する社会的支援を構築する上で、社会の側である一般市民等のHPDDという障害理解の促進が重要であるとの観点から、HPDDの人が関与した事件についての新聞や雑誌におけるマスコミ報道の特徴を分析し、問題点を指摘した。その結果、新聞報道においては、a)初期報道において「殺害事件＋障害・自閉・アスペ」の関連を記事内容にもつ傾向があり、b)「見だし」分析ではワンフレーズ報道にその特徴が顕著であり、c)発行地域別に見ると、事件発生近隣の地方版によりこの特徴が見られ、d)同時に、中央版、後期報道および解説記事等になると殺害と障害の関連を否定する論調が取り上げられることも確認された。雑誌報道は、a)事件の猟奇性特異性中心記事、b)事件の発生環境・要因中心記事、c)事件の報道姿勢検討中心記事、d)その他に分類される内容が多かった。いずれにしろ、「犯罪＝障害」の構造がイメージされる報道が多いことが認められた。

## 研究協力者

堀江まゆみ 白梅学園短期大学・教授

### A. 研究目的

最近、HPDDの人が関わった犯罪が報じられることが多い。本研究をすすめるにあたり、これら司法事例を取り上げ、犯罪の実態やその背景を正しく知ることは、重要な手がかりとなると考えた。

しかしながら、現在の司法制度では、被告人から直接情報を得ることは不可能であり、マスコミによる報道に頼るしかないのが現状である。

そのため、本研究において、まず、石井は、HPDDの人が引き起こしたとされる犯罪の弁護を手がけている副島弁護士との論議を行い、副島弁護士が直接被告人との接見を行った浅草事件についての知見を得ること。さらに、この浅草事件の記事・著作（山元壽子氏、佐藤幹夫氏による記事、『創』2004.11.12,1創出版社、および「自閉症裁判」—レッサーパンダ裁判の「罪と罰」—、佐藤幹夫著 洋泉社 2005.3.17）により、被告人のHPDD固有の障害からくる行動特性および心理メカニズムを考察する。同時に東京都自閉症・発達障害支援センター等の活動の中で得られたHPDDの人の障害からくる行動特性についての諸事例を比較検討することで、HPDDの人が関与している犯罪の福祉心理学的解析を行うこととした。併せて、反社会的犯罪を生じさせない対人援助の有り様を実践事例を通して検討する。

また、堀江は、社会におけるHPDDの障害理解促進に必要な要素を抽出することを目的として、HPDDの人が関わった豊川事件、長崎事件についてのマスメディアによる報道の特徴を分析し、課題を指摘することである。

### B. 研究方法と結果

#### 【研究1】

##### 1. 方法

1)副島弁護士との対談により、HPDDの被告人が関わった犯罪について、公表されていない実態、公表されている報道と被告人の実態との食い違い、取り調べや裁判の経過などを調査、検討した。

2)副島弁護士との対談の中から、浅草事件に関して、被告人の実態をある程度正確に記述した文献の紹介を受け、文献の記述の中から、被告人に見られるHPDDの障害による行動特性を抽出、検討した。

3)2)で抽出した障害からくる行動特性

を、東京都自閉症・発達障害支援センターの活動等で得られた知見と比較検討し、犯罪に至る心理メカニズムを検討した。

4)反社会的行動を起こしたHPDDの人への支援の実践を取り上げ、反社会的行動の予防、療育も含めて、地域で暮らすHPDDの人に必要な支援について検討した。

##### 2. 結果

HPDDの人の多くが、社会性の障害、特に社会的ルールやモラルに自律的に従いにくい面を持つことから、非社会的行動を起こしやすい。しかし、家庭外で反社会的行動、特に意図的な犯罪に至ることは、むしろ少ないことが、東京都自閉症・発達障害支援センターの相談事例から明らかになった。

社会的行動を阻害するHPDDの障害特性として以下の事項があげられる。

①認知の障害：他者理解の不全、時系列の認知の不全、視覚優位の理解、現実—空想（ビジョン）・過去—現在・自己—他といった意識の切替の不全

②統合性の障害：体系的な自己形成の不全、組織的な行動の不全

③社会性の障害：認知の障害、統合性の障害から、非社会的行動をとりやすいこれらのことから、HPDDの人は、非社会的行動を生じやすく、人から避けられ、また、自らも人を避けて生活する傾向を助長していくことが認められている。一方で、他人に何かを求める事態となった場合、相手にその意味が伝わらないような要求表現（遠回しな言い方、自分本位な理屈を持ち出すなど）をしたり、好ましいと思おう相手に対して、状況を構わず一方的に接近してしまうなど、本能的な行動とはいえず、稚拙で相手に不安や恐怖心を与えるような非社会的な行動をとってしまうことになりやすい。このような行動に対する相手の驚きや拒絶の反応によって、情緒的に混乱し、即物的で短絡的な反撃や攻撃、例えば、怖くなって人を押しのける、カッとなって叩く、パニックなどの爆発的な行動など、を起こすことになるのである。

同時に、HPDDの人は、その障害特性により、自らの意図や意志にそって自律的に行動を起こすことができにくいために、人や状況に対しての意図的・計画的なアクティングアウト（踏みだし行為）＝「人への恨みを晴らすために相手を殺傷しようと考えて実行する」などといったことができない。

以上のことをまとめると、反射的・衝動的な非社会的行動は起こしやすいが、特定の人に向けた意図的な反社会的行動は「起こしにくい」と考えられるのである。本研究のHPDDに関わる反社会的犯罪の調査により、実際に犯罪を起こしたHPDDの人に、意図的・計画的なアクティングアウト

(踏み出し行為)ができにくい特性が、かなり明確に確認された。

次に、犯罪の調査において、非社会的な行動形態の中から反社会的行動が生じてきた過程を追ってみると、それを抑止する人的支援がないということに共通性があることが分かった。東京都自閉症・発達障害支援センターの相談事例からは、家族をはじめとする「人」がその当事者を取り巻いて、生活や対応の状況を作っている限りにおいては、問題が家庭外の社会に出てくることは少ないことが示された。「家庭では問題がない」のではない。家庭内で、著しく非社会的な行動を容認せざるを得なかったり、家庭内暴力といった反社会的行動が生じている場合は多い。しかし、その状況の中で人の対応で、暴力などの反社会的行動は家庭等の内で抑えられ、結果として家庭外に出てこない状況となっている。HPDD当事者にとってもその家族にとっても実生活上の困難さを抱えながら、長い間、その生活や関係の改善ができないままでいるのである。今回の犯罪の調査から、家族の耐性が限界を超えたり、家族の死亡などで、支える人がいなくなって孤独になったときに、HPDD当事者は社会に押し出され、結果としてアクティングアウト(踏み出し行為)としてとらえられる状態となっていることが確認された。

また、社会福祉施設による支援実践により明確になったことは、生活上の面倒をみるいわば本人に対する保護的役割をとる者と、ルールや行動の基準枠を明確に示していくフレームワーカーという、支援者における役割の分化と協働の必要性であった。施設は、その二つの役割を果たしている。このことから、この障害者に対して適切な抑止的機能を持つシェルター(一時避難場所)を確保することの重要性も認識された。

## 【研究2】

### 1. 方法

1)分析対象事件は、豊川事件および長崎事件とした。

2)分析対象新聞は、主要新聞4社東京版とし、各社が提供する新聞記事検索データベースにより記事検索を行い、新聞記事縮刷版から報道当時の記事を入手した。

3)分析対象雑誌は、財団法人大宅文庫が提供する雑誌記事権検索データベース(OMIS、271万件収録)により記事検索を行い、同文庫に収録されている雑誌から報道当時の記事を入手した。

4)上記により、収集した記事に使用されている見だし用語、記事本文で使われている高機能広汎性発達障害関連部分を抽出しデータベース化したうえで、特徴の検討を行った。

### 2. 結果

新聞報道におけるHPDD関連事件の記事内容の特徴としては、

①初期報道において「殺害事件+障害・自閉・アスペ」の関連を記事内容にもつ傾向があった。

②「見だし」分析ではワンフレーズ報道にその特徴が顕著であった。

③発行地域別に見ると、事件発生近隣の地方版によりこの特徴が見られた。

④同時に、中央版、後期報道および解説記事等になると殺害と障害の関連を否定する論調が取り上げられることも確認された。

雑誌報道における高機能広汎性発達障害関連事件の記事内容の特徴としては：

①事件の猟奇性特異性中心記事

②事件の発生環境・要因中心記事

③事件の報道姿勢検討中心記事

に分けて考えられる。②は件数としては少ないものの、②+①報道を重ねて読む読者にとっては意識下において「犯罪=障害」の構造がイメージされる構造も示唆された。

## C. 考察

### 【研究1】

HPDDの人には、「人と共に生きにくい」と同時に、人の支援なしには社会では生きにくい」という矛盾がある。HPDDの人の反社会的行動について予防や行動改善を考えるのであれば、彼らが我慢してルールに沿えるように抑制的な支援を行うだけでは不十分であることが本研究から分かった。HPDDに対応できる支援者が、個々の心理特性に合わせて、適切な関わり(予防、心理的健康性の獲得と維持)や療育(改善や教育)を継続して提供できるシステム(専門性を有する支援者組織=人間関係網)があれば、程度の差はあっても、HPDDの人がルールや人から受ける支援の意味・有益性を理解し、反社会的行動を自己抑制する面が育つ可能性はあると考えられる。このようなシステムを更に効果的にするためには、教育、福祉、医療をはじめとする社会資源の緊密な連携が必至となる。

### 【研究2】

今後の課題としては、①情報を発信する側のメディアの課題をさらに明らかにし、今後、適切なHPDDの理解に基づいた記事内容が生成されるための提言を作成すること、および、②情報を受信する側の一般市民のHPDD理解の課題状況を検討し、適切なHPDD理解が促進されるためには、どのような情報内容および伝達手段が求められるかについて、社会心理学的およびイメージ心理学的に検討を行う必要がある。

## E. 研究発表

### 1. 論文発表

石井哲夫：LD・ADHD・自閉症・アスペルガー症候群「気がかりな子」の理解と援助；1-8、金子書房、2005.

副島洋明、佐藤幹彦：知的・発達障害者をめぐる裁判の現場から－三つの事件とこれからの福祉－、そだちの科学；94-102、日本評論社、2004.

副島洋明他：刑法三九条は削除せよ！是か非か、求められているのはむしろ新しい「責任能力論」である－処遇論と訴訟能力論の重要性を中心に、122-150、洋泉社、2004.

佐藤彰一、堀江まゆみ、野沢和弘、名川勝：知的障害者の地域生活トラブル、日本法社会学会2004年度学術大会要旨集、15-18、立命館大学、2004.

名川勝、佐藤彰一、堀江まゆみ：知的障害者の消費生活トラブルとその支援に関する研究、日本消費者教育学会第24回大会研究発表要旨集、18、京都教育大学、2004.

堀江まゆみ：知的障害のある人の消費者被害と消費生活の支援－生活支援ワーカー調査から－、さぼーと 51(3)；44-53、2004.

佐藤彰一、名川勝、堀江まゆみ：発達障害者の消費生活トラブル－その実態と法的・生活的支援のあり方－、国民生活研究 44(4) (印刷中)

### 2. 学会発表

石井哲夫：自閉症児者への社会福祉援助における臨床心理学的実践、第23回心理臨床学会、心理臨床ワークショップ.